2020年8月1日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

(事情により協会本部からストリーミング)

・読み：第6章21～30節

・引用：第14章24,25節

　前回は批判と賞讃どちらにも影響されず心を静かに安定させる、ということを説明しました。

批判に対して怒ることも、賞賛されて喜ぶことも、心が圧倒されている点では同じであり、サマットヴァム(動じない静かな心)とは反対の状態です。

Sameness of Mindと言うと、「絶えず怒っている人」もそれに該当するのかと考えるかもしれませんが、ここで言っているのはそのことではありません。

いつも怒っている人、いつも悲しんでいる人、いつも鈍い人、いつもストレスを抱えている人のことではなく、いつも心静かな人のことです。

ヨーガのsameness of mindとは静けさが一定することであり、圧倒された状態のことではありませんが、だからと言って感じにくい鈍感な心ではなく、感じやすさ(sensitivity)を備えた健康的な心のことです。

さて前回説明した他者からの賞讃に加えて、自分で自分を褒める**自己賞讃**というさらにこみ入った問題も考える必要があります。

他人からは評価されていないのに自己評価の高い自己賞讃は、自分の能力に対する確信である自信のことではありません。

そしてこの自己賞讃の心があるかどうか外からは分りませんが、自分の内なる神は知っています。

他人から褒められても表面上は「ナーハム、ナーハム」(私ではない、私ではない)と謙虚な態度を装っている人も、心の中は「アハム、アハム」(私だ、私だ)だったりします。

この**自己賞讃も静かな心の障害**であり、日本語では「天狗になる」と言いますが、ベンガル語では「胸が大きくなる」というニュアンスで表現します。

自己賞讃もヨーガ(サマットヴァム)の大敵ですが、粗大な敵には抵抗することができても、自分の心の中から現れる精妙な(気づきにくい)敵に打ち克つのは容易ではありません。

みな口では「私は何もできません」と言いながら、心では自分を過大評価しています。

謙虚の実践は難しいですが重要で、そのためにはまずは気づきが必要です。

英語で、「自分が自分のためにラッパを吹く」という表現があります。

最近の風潮ですが、YouTubeやSNSなどで多くの人が自己宣伝に熱心です。

他人には聞こえないラッパの音も、自分にははっきり聞こえます。

『謙虚な心』に描かれているラーマクリシュナの弟子ナーグ・マハーシャヤについて、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュのコメントがあります。

ナーグ・マハーシャヤは彼の中の「アハン」(エゴ、自惚れ)が頭をもたげるたび、それを何度でも棒で叩いて徹底的に打ちのめした

何度も頭をもたげる蛇を棒で叩くことを連想させる表現ですが、ここで言う棒とは識別のことです。

何回も識別を繰り返すことは大変ですが、そうしないと霊的に進めません。

これは我々にとって、「内なる戦い」(internal struggle)です。

自己賞讃は問題があると言いましたが、その逆の**自己嫌悪もよくありません。**

スワミジが何度も言っているように、**自信は絶対に必要です。**

スワミジは神への信仰、聖典への信仰、グルへの従順に加えて、自分自身への信頼の重要性を説いています。

ここまでは前回の話の補足ですが、今日これから話すことについては第14章24，25節を見てください。

***真我に定住して苦と楽とを区別せず、土塊も石も黄金も同等に見て、全ての事物に好悪の感情をおこさず、******賞讃と非難、名誉と不名誉に心を動かさぬ人、//14-24***

***名誉と不名誉に心動かさず、友と敵を同じように扱い、仕事に対するいかなる野心も捨てた人、以上のような人は、これら三性質を超越した人、と言えよう。//14-25***

ここでの要旨は**グナーティータハ**(gunatitah:三性質の超越)であり、この第14章全体が三性質(トリグナ)についての説明になっています。

サットワ、ラジャス、タマスの三つのグナが我々にどのような影響を与えるのかが、詳しく書かれています。

アルジュナはさらに三つのグナを超越した人がいたなら、彼はどのような特徴を持っているのかを尋ね、シュリ・クリシュナがそれに答えます。

**グナーティータハ**(グナの超越)

**スティータ・プラッギャー**(安定して継続する智慧)

**サマットヴァム**(静かで動じない心)

**ヨーギ**(悟った人)

はみな同じことを意味します。

グナーティータハは　guna-atitah であり、アティータ(atitah)は超越という意味です。

『バガヴァッド・ギーター』の各章で用いられている異なった表現が同じことを意味します。

グナーティータハはこの第14章、スティータ・プラッギャーは第2章で使われますが、みな悟った人のことを指しています。

**「グナを超越した人は、両極端のどちらの状態にも影響されない」**と言いますが、両極端とは何なのか、皆さんがイメージしやすいようにシュリ・クリシュナは具体的な例を挙げます。

14章24節で挙げられている両極端の例は、まず*「苦と楽」*(ドゥフカ・スカ)です。

「喜びと悲しみ」と言うこともできます。

またグナを超越した人は、*「土塊も石も黄金も同等に見」*ます。

この「土くれと金を同じものと見る」という表現を読んで、これにとてもよく似た有名な例を思い出しませんか？

参加者:シュリ・ラーマクリシュナが金貨をガンジス河に捨てたことです。

そうです！ とても有名な例であり、この24節の表現とまったく同じと言っても過言ではありません。

私が放棄の実践をしていた頃のある日、パンチャヴァティの近くのガンジス河に行き、ひと握りの土とひと握りのコインを手に取りました。 そして私は、「土と金は同じものだ」と言って識別を始めました。 土は金であり、金は土です。 両者が同じであることを悟った後、私は両方とも河に投げ込みました。 私は神なる母に「母よ、私は物質的な富や地上の繁栄ではなく、あなたが私の心の中に住むことだけを望んでいます」と祈りました。

*(註1)*

皆さんにはできるでしょうか？

しかし、これは『ラーマクリシュナの生涯』に記録されている実例なのです。

「土は金、金は土」を、実際にはシュリ・ラーマクリシュナはベンガル語でリズムをつけて、「タカ　マティ、マティ　タカ」(Taka Mati, Mati Taka)と言いました。

タカは金、マティは土のことです。

ほとんどのベンガル人はこのラーマクリシュナの言葉を知っていますが、最近になってこの言葉はもともとの意味が少し変化し、ジョークとして使われるようになってきました。

それは土地の値段が高騰して、「土地は金」が文字通り言葉そのままになりかねない状態が出現し始めているからです。

もともとの教えは、誰もが決して手放したくない金と簡単に捨てられる土が同じである、というところがポイントだったのですが、最近の「土」は簡単に捨てられるものではなくなってきました。

『バガヴァッド・ギーター』14章のひとつの表現に関連して、シュリ・ラーマクリシュナの例を引用しました。

*「好悪の感情をおこさず」*は簡単に言えば「好き嫌い」のことです。

普通の人には好き嫌いがありますが、悟った人にとってすべては神なので好き嫌いの感情はありません。**悟った人の辞書には「嫌う・憎む」という言葉はありません。**

プリヤ(好き:priya) - アプリヤ(好きではない＝嫌い:apriya)がここでの両極端です。

*「心を動かさぬ人」*に対応するサンスクリット、dhira(ディーラ)も何回も出てくる言葉ですが、「忍耐強い」という意味があり、ここではスティーラ(sthira)と同じ「落ち着いた深い静けさ」を意味します。

以前の講話では、部屋の中に風が入ってきても揺らがないランプの炎にたとえました。

このdhiraの発音は難しく、日本語の濁音とは違う破裂音があるので、勉強する時には注意が必要です。

さて、悟った人は何に対して心を動かさないのか、ここで取り上げられている両極端の例である**名誉と不名誉**について説明します。

**マーナ**(名誉:mana) - **アパマーナ**(不名誉:apamana)

皆さんは名誉と不名誉という言葉に、どんなイメージを持っていますか？

参加者:褒められてプライドが満たされること。

ここで言う名誉とは、その前の*「賞讃と非難」*の賞讃(アートマ・サンストゥティヒ:atma-samstutih)とは違います。

「名誉と不名誉」が「賞讃と非難」とどう違うのか、これから説明します。

**名誉とは、特別扱いをされるということです。**

特別な扱いとは例えば何でしょうか?

セレモニーで主催者から特別ゲストとして招待され、飲み物など身の回りのことに気を使われ、VIP席が用意される、これが名誉の一例です。大勢の他の客とは区別されています。

僧侶が儀式に招かれた時は皆プラナムし、特別な待遇を受けます。

皆さんもきっと見たことがあると思います。

マーナの対義語はアパマーナであり、不名誉、侮辱と言う意味です。

賞讃の対義語は批判・非難ですが、**名誉の対義語は批判・非難ではなく不名誉・侮辱です。**

賞讃-非難と名誉-不名誉はそれぞれセットになっています。

マーナとアパマーナは正反対でありもちろん違うものなのですが、それらが*(悟った人にとっては)*トゥッリヤ(tulya)、一緒であると言っています。

ヨーギに与える影響は名誉も不名誉も一緒、つまり**悟った人は名誉・不名誉には影響されないのです。**

この影響されない人が、スティータ・プラッギャーでありグナーティータハです。

今はグナーティータハのしるしについての説明をしています。

悟った人にとっては名誉も不名誉もまた友も敵も同じなのですが、これから名誉と不名誉について物語を引用しながら説明します。

最初はシュカデーヴァの物語です。

シュカデーヴァはヴィヤーサデーヴァの息子であり、有名な聖者でブラフマルシでした。

聖者(リシ:rishi)には三つの種類があります。

**ブラフマルシ**(Brahmarshi:Brahma + rishi)

**デヴァルシ**(Devarshi:Deva + rishi)

**ラジャルシ**(Rajarshi:Raja + rishi)

たとえばナーラダはデヴァルシの一例ですが、聖典の中にもデヴァルシについての記述はそれほど多くありません。

ブラフマルシについては割合多く書かれていて、たとえばヴァシシュタはブラフマルシです。

悟った聖者は皆ブラフマルシと呼んでよいのですが、その中にもカテゴリーがあります。

悟りのレベルが普通の人、より高い人、最上の人です。

そしてシュカデーヴァは最高のブラフマルシです。シヴァ神は次のように言っています。

私シャンカラはブラフマンについて知っている。そしてすべての人間の中でヴィヤーサは『マハーバーラタ』や『プラーナ』などの数多くの聖典を著した聖者だが、彼でさえブラフマンのすべてを理解していたかどうか疑わしい。しかし息子のシュカデーヴァは間違いなく無限＝ブラフマンについて完全に知っていた。

*(このシャンカラとはシヴァ神の別名でシャンカラチャーリヤのことではない)*

シュカデーヴァはそれほどのレベルの聖者でした。

聖典『バーガヴァタム』では、シュカデーヴァは彼の父ヴィヤーサから学んだ教えに基づいて人々を導いています。

シュカは母親の胎内に16年間とどまっていたと言われます。

生まれて胎外に出ることによってマーヤーの影響を受けるのを嫌ったのかもしれません。

父のヴィヤーサは母親が大変なので生まれてくれるよう懇願し、それを聞き入れてシュカデーヴァは生まれましたが、生まれるとすぐに森に入りました。

シュカデーヴァにとって家族はマーヤーだったのです。

父のヴィヤーサは悟った聖者でしたがマーヤーの影響で息子への愛着があり、戻ってくれるよう頼みましたが、シュカデーヴァは聞き入れませんでした。

シュカデーヴァは自分の体に全く執着がなく、外を歩く時には一糸もまとわず裸でした。

とても若く、美貌の、そして純粋な青年が全裸で歩く姿を想像してください。

ホーリー・マザーの「純粋者が私の本性です」という言葉がありますが、シュカデーヴァも同じく純粋でした。全くからだ意識がありませんでした。

シュカデーヴァが湖のそばを通り過ぎる時、そこでは服を脱いで沐浴している美しい女性たちがいましたが、シュカデーヴァが彼女たちを気にすることはなく、女性たちのほうも全裸の彼を気にしませんでした。自分にからだ意識がなければ、他人からも気にされません。

『ラーマクリシュナの生涯』の中にも、このからだ意識についての創作ではない実話があります。シュリ・ラーマクリシュナは自分にからだ意識がなかったので、女性たちを見ても何も感じませんでした。

ヴィヤーサデーヴァが息子を連れ戻そうとそのあとを追いかけて湖のそばを通り過ぎた時、シュカデーヴァのことは全く気にしなかった女性たちが、あわてて湖から上がり服を着ました。

ヴィヤーサは女性たちに「若い息子のシュカが裸で通り過ぎた時には何も気にしなかったのに、老いた私のことはどうして気になるのか？」と尋ねました。

女性たちは、「シュカは若いですがからだ意識が全くありませんでした。それにくらべるとあなたは聖者ですがまだからだ意識が残っており、私たちもそれを察知してからだ意識がよみがえったのです」と答えました。

シュカデーヴァがどのレベルの聖者であるのかを説明するため、この話を紹介しました。

シュカデーヴァはブラフマルシの中でも最高の聖者です。

3番目の聖者のジャンルであるラジャルシの例は、有名なジャナカ王です。

(ラジャ＝王、リシ＝賢者)

名誉と不名誉についてシュカデーヴァの物語を紹介します。

シュカデーヴァは森から戻った後、父のヴィヤーサについて聖典を学びました。

シュカがさらに学びたい気持ちを持っていることを知ったヴィヤーサは、「私はシュカが知りたいと思っていることをすべて知っているかどうかわからない。自分としては教えるべきことを教えたが、それが正しいことを確認するためにも一度父である自分以外の師に就いたほうがよい」と考え、シュカにジャナカ王のもとに行って学ぶように言いました。

ジャナカは王でありながら悟った人であり、聖者たちもジャナカから学んでいました。

シュカデーヴァはジャナカの王宮に到着しましたが、ブラフマンのことを学びにシュカがやって来ていることを聞いたジャナカにはひとつの考えがありました。

シュカデーヴァは誰もが知る有名な聖者であり、普通なら特別なもてなしを受けるはずでしたが、彼が宮殿に入ろうとしても迎えの人間も案内の人間も誰も来ませんでした。

特別扱いどころか、普通の訪問者が受けるような並みの扱いすらされませんでした。

それが7日間続きました。

皆さんがある場所訪れたのに入り口で1時間放っておかれたら、そこで帰ってしまいませんか？　自分が侮辱されたと考えて、「二度と来るものか！」となりませんか？

シュカデーヴァはそこで帰ってしまうことはありませんでした。

なぜなら学びたかったから。そしてその表情には全く変化がありませんでした。

静かで幸せな表情を浮かべたまま、7日間待ち続けました。

8日目にジャナカ王のシュカデーヴァに対する扱いは一変しました。

特別な食事、飲み物、部屋、世話係の若い女性たちなどが用意されました。

最初の7日間とは正反対の特別扱いも7日続きましたが、その間もシュカデーヴァの表情は何も変わりませんでした。

粗末な扱いをされても特別扱いされても、シュカデーヴァにとっては一緒でした。

シュカデーヴァの態度が変わらないことを確認して、ジャナカはシュカデーヴァと面会しました。ジャナカはシュカデーヴァに、「あなたが私から学ぶためにやって来たことは知っていますが、その前にもうひとつあなたにやってもらいたいことがあります」と言いました。

宮殿の中には数多くの部屋があります。

音楽や歌で客をもてなす部屋やダンスホールもあり、接待のための美女もいます。

普通の人間はこれらの部屋に招かれれば喜びが顔に溢れ、ずっとどまっていたいと考えます。

ジャナカ王はシュカデーヴァに、「もし私の生徒になりたければ、このミルクを入れたカップを持って宮殿の中を歩き回り、すべての部屋をよく観察してださい。そして何を見たか私に報告してください。ただしミルクを一滴たりともこぼしてはなりません」と言いました。

普通の我々なら、目や耳が各部屋で行われていることに引き付けられ、カップのミルクから注意がそれてしまうのではないでしょうか？

このテストも7回続きましたが、シュカデーヴァはミルクを一滴もこぼしませんでした。

高名なシュカデーヴァがどれほどのレベルに達しているのかを確認したジャナカは、「私があなたに教えることは何もありません。どうぞお帰り下さい」と言いました。

**これが有名なマーナとアパマーナの例であり、最初の7日間がアパマーナ(ほったらかし:no reception)、次の7日間がマーナ(大歓迎:grand reception)ですが、シュカデーヴァはどちらの場合も全く変わりませんでした。**

偉大な人間を7日間完全に無視することは、まさにアパマーナです。侮辱です。

次の7日間は特別扱いのマーナです。

これはシュカデーヴァの例でしたが、マーナとアパマーナについてシュリ・ラーマクリシュナの例を話します。

これからお話しするのはとても感情的な(touchy)人間が引き起こした出来事ですが、興味深くかつマーナとアパマーナ両方(特別扱いと侮辱)についての深い示唆に富んでいます。

信者にとってシュリ・ラーマクリシュナは単なる尊敬を超えて、生ける神として礼拝の対象でした。これは信者によるひとつのマーナです。

しかしラーマクリシュナ自身は、「高い人から受ける奉仕も普通の人から受ける奉仕も私にとっては同じだ」と語っていました。

ここで言う高い人とは有名であったり地位や富を持った人という意味であり、普通の人とは地位がなかったり貧乏だったりする人のことです。

ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは劇作家で劇団の主催者であり、自身の劇場も所有していましたが、彼もラーマクリシュナを非常に尊敬していました。

『ラーマクリシュナの福音』の中にも、シュリ・チャイタニヤについて書かれたドラマを観劇するために、シュリ・ラーマクリシュナがギリシュ・チャンドラの劇場を度々訪れた事が書かれています。

『福音』の読者の皆さんはギリシュが大変な才能の持ち主である一方、大酒呑みであることをご存じだと思います。ギリシュももちろんラーマクリシュナをとても敬愛していました。

ある時いつものように酔ったギリシュ・チャンドラはシュリ・ラーマクリシュナに対して、「師よ！お願いがあります。私の息子として生まれ変わってください」と頼みました。

ギリシュ・チャンドラはシュリ・ラーマクリシュナのお世話がしたかったのです。

現実のギリシュとラーマクリシュナの関係では住んでいる場所などの問題もあり、ギリシュの好き勝手にはできませんが、もしラーマクリシュナが自分の息子として生まれたなら、いろいろな形で気の済むまで師に奉仕できると考えたのです。

決して悪意から発した願いではありませんでした。

この願いを聞いたシュリ・ラーマクリシュナは、「私はとても清らかな両親から生まれました。なぜあなたの子供として生まれなければならないのですか？」と答えました。

後に聖者になりましたが、この頃のギリシュ・チャンドラは世俗の楽しみに耽っていて、お世辞にも清らか(純粋)とは言えませんでした。

自分の願いが聞き入れられないと知ったギリシュ・チャンドラは酔っていたこともあり、怒り狂いました。そしてとても口汚くシュリ・ラーマクリシュナを罵りました。

ラーマクリシュナに同行していたラトゥ・マハラジはこれを見て、持っていた杖でギリシュ・チャンドラを叩こうとしましたが、別の信者に制止されました。

「シュリ・ラーマクリシュナ自身が何も言っていないのに、あなたがそんなことをしてはいけません」と制止されたラトゥ・マハラジですが、「あの時は本気でギリシュ・チャンドラを叩こうと思った」と後日回想しています。

酔って感情的になったギリシュ・チャンドラは最後には自分で招待しておきながら、シュリ・ラーマクリシュナに対して、「帰れ！」と言いました。

これは究極の侮辱(アパマーナ)ではないでしょうか。

シュリ・ラーマクリシュナは何も言い返さず静かに戻りましたが、帰りの馬車の中で「母なる神よ！ 単なるドラマの演者のひとりに過ぎないギリシュの間違いを気にしないでください。彼はあなたの影響を知らないのです」と言いました。

ラーマクリシュナは絶えずカーリー女神と自分を同一視していたので、ラーマクリシュナに対する侮辱は母なる神を侮辱したのと同じなのです。

イエス・キリストも同じことを言っています。

神よ！彼らを許してください、彼らは自分が何をしているのか知らないのです。

ここにも間違いを犯した相手に対する呪いや復讐ではなく、赦しがあります。

ドッキネッショルに戻ったシュリ・ラーマクリシュナは翌朝人に会うたび、前日のギリシュとの出来事を話して聞かせました。

シュリ・ラーマクリシュナはとても悲しそうに、「ギリシュは私を招いておきながら、とても汚い言葉で私を罵り、最後には私に対して『出て行け！』と怒鳴りました。私だけではなく私の両親も侮辱しました」と語りました。

弟子たちの反応は当然ながら、「ギリシュは罪びとです。そんな者のところになぜ行くのですか！ お願いですから今後はギリシュのところには行かないでください」でした。

別の弟子がやって来るとラーマクリシュナはまるで子供がするように、まったく同じ前日の末をまた最初から繰り返し話して聞かせるのでした。

ラームチャンドラ・ダッタも同じ話を聞かされましたが、彼の反応は他の弟子たちとは違っていました。

ラームチャンドラの師に対する答えは、シュリ・クリシュナの生涯と関係があります。

シュリ・クリシュナはマトゥラーに生まれましたが、ブリンダーバンで成長しました。

子供時代のクリシュナはブリンダーバンを流れるヤムナ川で水遊びや沐浴をしましたが、この川岸の近くの湖にカーリヤ(Kaliya)という名前の巨大な毒蛇が家族とともに住んでいました。

カーリヤが大量の毒を吐くのでそれは湖にとどまらず、近くのヤムナ川の水まで汚染されてしまい、そのことを知らずに水に触れて亡くなったクリシュナの友人もいました。。

クリシュナの家族や友人たちは皆このことを知っていたので、湖の近くのヤムナ川には近づきませんでした。

カーリヤが問題を起こしていることを聞いたシュリ・クリシュナは、カーリヤの棲家を訪れました。カーリヤも普通の蛇ではなく、シュリ・クリシュナが神であることを知っていました。

クリシュナはカーリヤを殺そうとしましたが、カーリヤの妻が泣いて命乞いしました。

シュリ・クリシュナはカーリヤに対し、「なぜおまえは毒を吐くのだ？」と叱りました。

この時のカーリヤの返事はとても面白いものでした。

「神よ！　あなたは私に毒を与えました。だから与えられた毒を吐くのです。私は甘露を持っていないので、それを吐くことはできません」。

このシュリ・クリシュナの故事を引用して、ラームチャンドラ・ダッタはラーマクリシュナに答えました。

「師よ！　ギリシュ・チャンドラの言葉の毒は*(神である)*あなたが彼に与えたのです。ギリシュは与えられたものを使ってあなたを礼拝しているに過ぎません」。

ギリシュにはその時にはまだ甘露は与えられていませんでした。

ラームチャンドラの言葉を聞いたシュリ・ラーマクリシュナは黙ってそれを受け入れました。

ラームチャンドラ・ダッタは心からラーマクリシュナが神であると信じていたので、ギリシュ・チャンドラの感情的な性格はシュリ・ラーマクリシュナが与えた、と考えたのです。

ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはその性格と飲酒の影響で度々問題を起こしていましたが、彼自身はそのことを気にもせず、後悔することもありませんでした。

子供が問題を起こし父母に迷惑をかけても、本人は何とも思っていないのと似ています。

しかし彼の周囲の友人たちは、「ギリシュよ、聖者ラーマクリシュナに対してあのような振る舞いをするなど、とても許されないことだ」と彼を諫めました。

時と共に酒量も減りその影響がなくなってくると、ギリシュは彼がこれまでシュリ・ラーマクリシュナに対して行ってきたこと思い出し、それがいかに間違っていたかを理解し、後悔に苛まれて朝から泣いていました。

全知のシュリ・ラーマクリシュナはもちろんそのことを知っていたので、ギリシュのもとを訪れることにしました。

普通の人なら過去にあれほど自分に無礼(アパマーナ)をはたらいた人間のところを、再び訪れようなどと思うでしょうか？ 逆に仕返しをしてやろう、と考えてもおかしくありません。

**シュリ・ラーマクリシュナにとっては、マーナもアパマーナも同じだったのです。**

シュリ・ラーマクリシュナはラームチャンドラ・ダッタと一緒に馬車でギリシュのもとを訪れました。号泣しながら師の前にひれ伏して過去の過ちを詫びるギリシュを、シュリ・ラーマクリシュナは慰めました。

最後はホーリー・マザーの話です。

彼女の義妹(弟の妻)パグリ・マミは(Pagli-mami)精神に問題があり、皆から、「頭のおかしいおばさん」(mad aunt)と呼ばれていました。

その頭のおかしいおばさんはいつもマザーに文句ばかり言っていましたが、それらはすべて彼女の娘(マザーにとっては姪)のラドゥに関することでした。

ラドゥは自分の母親のことが好きではなく、ホーリー・マザーに懐いていました。

頭のおかしいおばさんは、「ラドゥが私の言うことは聞かずにマザーの言うことを聞くのは、マザーが彼女をコントロールしているからだ」、とか「マザーは親族や困っている人々に食べ物や飲み物、その他いろいろ与えるが、すべて私の娘のラドゥ一人だけに上げてくれ」などと言うのです。

マザーがその要求を聞き入れなかったので、頭のおかしいおばさんは散々マザーの悪口を言いました。

しかしマザーにとってそれは言葉とすら言えないただの声であり、まったく気にせずに聞き流しました。

我々が他人から自分の悪口を言われたら、それを言葉ではなくただのサウンドだと思えるでしょうか？

この頭のおかしいおばさんはある時などはマザーに対して一晩中、「死ね！　死ね！」と言い続けました。

翌朝マザーはこのことについて、「彼女は私が不死であることを知らない」と話しました。

信者はホーリー・マザーを女神として礼拝していましたし、シュリ・ラーマクリシュナ自身も儀式としてホーリー・マザーを礼拝しました。

今日は両極端の例として名誉と不名誉を取り上げ、それに影響されないとはどういうことかを説明しました。

**両極端のどちらにも心揺らがない人が、グナーティータハ**(トリグナーティータハ)であり、スティータ・プラッギャーです。

他にもブラフマッギャー(ブラフマンの悟り)、イシュワラジャーニタ、イシュワラドゥラシュタ、アートマッギャーなどいろいろな表現がありますが、みな同じ意味です。

註１)Ramakrishna: When I was practising renunciation, one day I went to the Ganges near the Panchavati and took up a handful of earth and a handful of coins; then I began to discriminate, saying that earth and gold are one and the same; earth is gold and gold is earth; and after realizing the sameness, I threw both into the river. I prayed to my Divine Mother, saying: "O Mother, I do not desire material wealth or earthly prosperity, but only that you dwell within my heart."